

一月の保育

生活訓練

倉橋 惣三

新らしい一月は、大東亞戦下二度目のお正月である。第一回は、何分戦争が始まつてすぐのことで、その真相は素より、正しい實感も、幼児等にはまだ分らなかつた。開戦第一日の大戦果は、多くのおとなにさへも、眞珠灣を地圖の上でさがさせたりした。幼児にそれが分らないのは當然であつた。或は、多くの幼稚園には、太平洋地圖が特に貼られてはゐなかつたかも知れない。そうして、いつもさへ慌しい年の暮が、多少は薄氣味悪い緊張を交へた一段の慌しさの中に、いつももなく暮れてお正月になつたのであつた。迎年の用意といつたことも、平生のやうでないのは素より、戦時下のお正月といふものを、落ちついて幼児達に待たせる、適當な心準備もなかつたかも知れない。但し、そういふ中にも、緒戦第一の素晴らしさに、感激の胸が張つて、國家的確信と、國家的希望とを、國民的喜びの上に盛り上げられて、十二月八日からつゞく幾日の昭和十六年に次いで、明るく勇ましく昭和十七年を、幼児等と迎へたことは言ふまでもない。

が、それが、こん度はどうだ。之れが自分の國のことでなく、國の計畫の嬉しい實現でなかつたら、目を拭ひ、耳を疑ふといふあの月並な言ひ方をもつて来るであらう急進、急襲、そうして、必勝、必利。幼稚園には大きな地圖が貼り掲げられる。新聞の切抜が貼りならべられる。今までは可愛らしい幼児の時間の音楽やお話だけを送つて来た保育室のラジオが、勇ましい軍曲に伴ふ嚴肅壮大な大本營の發表を、室一ぱいに漲らせる。月の八日毎には、小さい頭を伏せて遙拜し、小さい目を閉じて黙禱し、小さい耳を聳て、大詔の聖旨と實踐を學び、小さい口を開いて國歌と行進曲とを高唱し、斯うして、幼な心にも、時局を感じ、時局を慨し、時局の緊張を重ね來つたのである。昭和十八年の一切の生活訓練は、幼児のこの心の上に置かれなければならぬ。

正月始めて幼児に會ふ時、いつもいふオメテタウを、いつものやうに個人的な加齡の祝ひ言葉としてとなく、國民としてのオメテタウの心と響とに満たさなければならぬ。それを理屈づけるのではない、それを諭示するでもない。先生が、先づその心を以てすると共に、幼児もそれ相當に持つてゐるであらう此の心持ちに觸れてやるのである。

年齢の一つ増すことは、幼児にとつては、大きな自重感そのものである。これは、充分活用しなければならぬ。心を新たにすといふことは、古び易いおとなの心に就てのことである。幼児の心はいつだつて新らしい。たゞ一ヶ年の發達を、自重の形で一階段くぎりをつけて強く感じさせるために、お正月はよく出來てゐる

と思ふ。その意味で、生活訓練の上にも、好個のいゝくぎりづけが出来る。

自重といふと大げさのやうであるが、幼児には幼児の自重があり、それが自己訓練の大きな力になることは、おとなの場合と變りはない。たゞ、幼児の場合、その自重は傍からの認識によつて支へられる。認識せられない自重は、時に不健全ならはれなしたりする。尤も、その認識は、その自重に對して、實に於ても度に於ても、適正のものでなくてはならぬ。傍からの認識が勝ち過ぎると、おだてになり、無理強めになる。二つとも、生活訓練の禁物である。巧みな方法としては、幼児の自重の一つ下のところに認識を控へて、その残りの分を幼児自身のほんとうの自重力に餘して置くのがいゝ。先生が認めて呉れる。自分は實はそれ以上だといふところに、自ら自分を持ち上げてゆく餘地と餘力がある譯である。

自重の教育力は、自分に及ぼしてゆくところにある。それを他に及ぼさせることは、然るべく抑へなければならぬ。つまり、えはりの抑へである。えはりはいいつの場合でも原始的なものである。従つて子どもにあり易いことであるが、そういう子どもらしさは子どもにも許してはならない。そんな癖、つまりそんな、原始的な生活感情の味はひつけると、おとなになつても、子どもらしいえばりをつづけたがることになるからである。えばりは原始的であると共に、自重の不満足感からも起るものである。自尊心が起る。傍から認識して貰へぬ。自分だけで自重感を満足し得ぬ。そ

こでえはる。つまり、弱い相手を求めて、或は相手を弱いとして、辛うじて、自分の自重感を味はうとするのである。前に高く認識し過ぎてはいけぬといつたが、此の意味では、低く認識するのもよくない。適正のものでなくてはならぬと言つたのは此の加減である。

幼児の自尊心を適正に指導し得る人にして、先づ一人前の生活訓練者といへよう。お正月は保母さんにとつて、その試金石ともならう。

自由遊戯

上遠文子

一つ御年がふえました。お雑煮を澤山戴いてうれしくお正月。圓いお顔を益々圓くして、えびす様のやうに、にこ／＼して幼稚園へ勇んでやつて來ました。

まだ／＼と寒くなる今日此頃、午前中は殆んど屋内保でせう。云ふまでもなく御部屋は御庭よりも活動區域とても申しませうか、せまい事は勿論です。併し、幼児達は別に加減する事もなく、全活動力を發揮して居ります。私達、指導する者は、幼児の活動力を折りまげぬ様に、そして充分體力の錬成に力める様心掛けねばなりません。又前月にも申しあげた様に、換氣衛生に特に注意せねばならぬ事を重ねて此處に記しませう。

かるた、双六、羽子つき、凧あげお正月の來るよるこびでし